

日本におけるストリートダンスの発展過程に関する研究

スポーツ文化研究領域

5019A007-7 生沼 みなみ

研究指導教員：中澤 篤史 准教授

【第1章】

国際オリンピック委員会（以下、「IOC」と記す）は2020年12月7日に、オンラインの理事会において2024年パリオリンピックの実施競技と種目を正式に決定し、また、ブレイクダンスの初採用が決定した（朝日新聞、2020）。ブレイクダンスは、ストリートダンスの源流であり、ストリートダンスの一種のスタイルである。また、昨今では、日本発のプロダンスリーグ『D.LEAGUE』が、2021年1月から始まるなど、ストリートダンスの発展と普及を目的とした様々な取り組みが行われており、日本におけるストリートダンスを取り巻く状況が変化していることが伺える。

以上の問題関心から、本研究では、ストリートダンスの発展過程を明らかにすることを目的とする。また、先行研究の検討において、日本におけるストリートダンスを取り巻く環境のキーワードとして、若者・大衆文化・音楽・競技の4つを捉えた。

【第2章】

第2章では、日本における全国のダンススタジオ数、全国レベルの大会数がどのように変化してきたのかについて、計量分析を行い、ストリートダンスの発展過程について検討した。

第1節で明らかになったこととして、まず、ダンススタジオの地域分布をみると、全国各地に広がっていることがわかった。さらに、各ダンススタジオの開校年より、1980年代から1990年代にかけて緩やかに増加しており、2000年代以降になると、より顕著に増加する傾向がみられた。2000年代以降の増加の要因として、①子ども、女性からの人気を獲得したこと、②路上規制が強化されたこと、③ダンススタジオ

が「風営法」の対象外に位置づけられたこと、の3つが伺えた。また、1980年代から1990年代にかけて開校したダンススタジオのうち、フィットネス事業、その他のジャンルのダンスと関連して開校されたスタジオが幾つかみられた。当時、エアロビクスが流行していたことが伺えた。

第2節で明らかになったこととして、まず、全国レベルの大会数は、2010年頃から急速な増加傾向がみられた。加えて、大会の詳細をみてみると、参加人数も増加していることがわかった。さらには、部活動や学生を対象とした大会が増加していることが特徴としてみられたことから、学生以下の年代の人たちのストリートダンスの参加人口が増加していること、また、ストリートダンスを部活動で行う学校が増加したことが伺えた。大会が増加した要因として、大きな影響力を持つ大手企業からの支援、また、ストリートダンスに関連した団体数が多いことが挙げられる。後者については、まず、各大会の主催団体を確認すると、その数が非常に多い傾向がみられた。ストリートダンスを統一する組織がないことから、それぞれ異なる目的のもと、特に2000年以降にストリートダンスに関連した団体が多く設立されている。このことにより、2000年以降に大会数の数が増大したことが伺えた。

【第3章】

第3章では、若者、大衆文化、音楽、競技の4つの観点から、2000年代以降にダンススタジオ数、大会数が増加した要因を明らかにすることを目的とした。

若者の観点からは、以下の内容が伺えた、1980年代のバブル経済期から、バブル崩壊まで

の過程において、若者の将来やお金に対する価値観や消費行動が変容し、結果として、サブカルチャーやカウンターカルチャーの要素を持ったものを大衆の前に表出させた。そして、フリーター志向のダンサーや、アルバイトをしながらダンサーを目指す若者の存在が顕在化したことが伺えた。

大衆文化の観点からは、以下の内容が明らかになった。まず、これまで若者からの支持が強くみられてきたストリートダンスが、幅広い世代が行うものになっていったことが伺えた。その要因として2つ挙げられる。1つ目は、人々の自己表現・余暇活動への関心の高まりである。2つ目は、健康とストリートダンスの結びつきである。また、YouTubeやSNS、カラオケの普及によって、ダンス全般が身近なものとなった。特に、YouTubeやSNSは、誰でも簡単に動画投稿が行えるという特徴を持っていることなどから、動画から簡単に技術の習得ができるようになり、また、テレビとは異なる形で自身のダンスを発信できるようになった。

次に、音楽に焦点を当てて検討した結果、以下の内容が明らかになった。まず、ストリート文化において、音楽が重要な役割を果たしていたことが伺える。このことより、影響力の強い音楽は、社会がストリート文化への関心を高めた要因であることが伺えた。また、1980年代頃から、MVやタイアップが新たな音楽メディア媒体として誕生したことにより、パフォーマンス性の高い音楽が広まったこと、そして、YouTubeなどの無料動画配信サイト、2000年代におけるデジタル音楽の普及、1990年代前半から徐々に浸透し始めたJポップという用語の誕生などによって音楽のあり方が変容した。さらに、2000年代のライブ・エンターテインメント市場は、継続的に順調な伸びを見せ、「生」で聴く、観ることに価値が置かれるようになった。ライブハウスの多様化により、音楽だけではなく、ストリートダンスのイベントを行えるクラブ、ホールが新設された。

最後に、競技に焦点を当てて検討した結果、以下の内容が明らかになった。まず、ストリートダンスのプロリーグ設立については、ダンサーや音楽の権利の分配、著作権の保護ができるシステムの導入が特徴としてみられた。また、「ダンス観戦」が浸透していくことによって、より幅広く、新たなダンスビジネスが展開されるようになると考えられる。

2024年パリオリンピックの新種目として採用されたブレイクダンスは、エンターテインメント性に優れており、見栄えのある都市型スポーツとして選出された。日本では、都市型スポーツの促進を目的とした取り組みが行われている。現在、ブレイクダンスがオリンピックの競技種目となったことを受け、ブレイクダンスの文化性をどう担保するのかといった議論が行われている。採点競技としてのブレイクダンスの特性を今後より明確にしていく必要があると考えられる。国際レベルの大会に出場経験のあるAさんは、ブレイクダンスのことを競技と呼ぶことに違和感を感じている一方で、オリンピック種目になることに対しては肯定的な意見であることがわかった。また、ブレイクダンスを採点によって勝敗をつけることに対して、若干否定的な意見であった。

【結章】

本研究では、若者、大衆文化、音楽、競技の4つの観点からストリートダンスが発展過程を検討してきた。①技術・テクノロジーの発展、②若者を中心としたパフォーマンス性や見栄えのあるものに対する関心の高まり、③若者だけではなく幅広い世代が行えるものになった、④女性からの人気の獲得、の4点が、ストリートダンスの発展に影響を与えたことが伺えた。

今後ブレイクダンスがオリンピック競技として、また、採点競技として意味合いが強まることになれば、採点競技としてのブレイクダンスの文化性をどう担保していくかについて議論を重ねることも重要である。